

ドラマティック日本史第5弾

「江戸時代を彩った絵師【俵屋宗達、尾形光琳、伊藤若冲】

日時 令和8年(2026)9月7日(月) 10::00～11:40

場所 茨木クリエイティブセンター

講師 若村 亮 先生



琳派(りんぱ)とは？

大和絵の伝統を基盤とし、安土桃山時代から江戸時代にかけてあらわれた、装飾的傾向の強い画風の一派を言う。本阿弥光悦を祖とし、俵屋宗達を経て、尾形光琳・尾形乾山の兄弟によって発展し、その後、酒井抱一(1761-1828)や鈴木其一(1796-1858)によって江戸の町に定着した。「琳派」という名称は、1960年以降に、代表的な絵師 尾形光琳の「琳」の字をとって呼ばれるようになったものである。

琳派の特徴

他の絵師の流派の継承が家系と画系が重なるのに対し、琳派の継承はその著作に影響を受けた絵師達が心の中で密かに師と仰ぎ模範として学ぶ「私淑」による断続的なものである。ハッキリとした意思をもって受け継がれており、その画風は独創性に満ち、斬新なデザイン、写実へのこだわり、豊かな表現・表情に特徴がある。また、パターンの繰り返し技法やたらしこみの技法などにも特色が見られる。

本阿弥光悦 (1558-1637)

京都の刀剣鑑定の家柄に生まれ、絵・書画・陶芸・漆芸などに当代一流の天分をあらわした。

俵屋宗達との共同制作「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」は重要文化財。ほかに「舟橋蒔絵硯箱」は国宝、「黒楽茶碗」が重要文化財など。

俵屋宗達 (1570?-1640?)

京都で扇や絵を商う工房「俵屋」を率いた絵師で、その才を本阿弥光悦に認められ、作品の共同制作者にもなる。

「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」のほか、独自には建仁寺の「風神雷神図屏風」は国宝、養源院の「唐獅子図杉戸」は重要文化財など。

尾形光琳 (1658-1716)

京都の呉服商「雁金屋」の次男。

本阿弥光悦、俵屋宗達に私淑し、大和絵をさらに革新・大胆華麗な装飾画風を大成した。「紅白梅図屏風」「八橋蒔絵螺鈿硯箱」は国宝、「扇面貼交手篋」は重要文化財など。

尾形乾山 (1663-1743)

尾形光琳の弟。「松波文蓋物」が重要文化財など。

～琳派と同時代の絵師～

伊藤若冲 (1716-1800)

京都錦市場青物問屋「枡屋」の跡取りとして生まれるが、絵を描くこと以外には何の興味も示さず生涯を過ごす。当初は狩野派に学び、後に中国宋画に接し、徹底的な観察からあらゆる動物・植物の神髄が見えるようになり、独自の多くの傑作を生み出した。



日本よりも海外での評価が高く、近年逆輸入により人気が出ている。

(記事:1班広報 石田哲也)